

令和3年度 調布市立多摩川小学校 学校評価報告書（学校長 安藤 力也）

学校の教育目標		
○自分の考えをもつ子（知） ◎思いやりのある子（徳） ○体をきたえる子（体）		
目指す学校像(ビジョン) 例) 学校像, 教員像, 児童・生徒像		
「子ども一人一人を大切に作る学校」		
1：個性が尊重され、一人一人が大切にされる学校 2：楽しく学び、確かな学力が身に付く学校 3：健康と安全を大切に作る学校		
4：教職員が専門性を高め合い、共に学び合う学校 5：保護者・地域等と共に歩む学校		

調布市立学校における共通した領域 <短期的な経営目標>						
1 豊かな心(徳)		2 確かな学力(知)		3 健やかな体(体)		
自己評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価
	①学校経営方針の柱として「自他尊重の精神の涵養」を位置付け、校長自ら全教育活動を通じて、自分や他者を大切にすることに関連して、教員、地域・保護者、児童に発信し続ける。	B	①各教科、領域では主体的・対話的で深い学びを実現するために、校内研究やOJT等の機会を活用し、指導力の向上を図る。ICT機器の効果的な活用、言語活動に重点を置いた学習形態について研究を深め、授業に活かす。	B	①日々の体育授業や体育的活動の充実を図ると共に、児童の運動の日常化を目指した取組の充実を図り、体力向上を目指す。マラソン、水泳、なわとび、鉄棒等の体育学習で活用するカードの充実を図り、休み時間や家庭でも日常的に運動に親しめるように学校・学年だより等を通じて家庭に啓発する。	B
	②児童が身に付ける基本行動を全校共通とする「多摩川スタンダード」「よい子のやくそく」及び感染症対策の視点に立った生活の仕方について一層の定着を図る。また、重点取組項目の一つを「すすんであいさつ」とし、既存の取組内容を見直し、年間を通して意図的・計画的に励行に努める。	C	②校内研究と関連付け、児童1人1台タブレット端末をはじめとするICT機器を効果的に活用した授業を積極的に行い、グローバルな人材育成を目指し、児童の思考力・表現力、情報活用能力を伸ばす授業の推進を図る。学校行事や体験的活動については、実施方法を工夫したり、地域人材を活用したりして推進すると共に、Googlemeet等のオンラインツールを活用し、遠隔地や外部人材との交流学習等を推進する。	A	②調布市教育委員会の方針の下、新型コロナウイルス感染状況を踏まえながら、児童の安全を最優先に考え、学校行事を中心とした教育課程の見直しを図るとともに、児童が安心して学校生活を送ることができるような保健・衛生面、生活の仕方について検討し、児童の指導に生かす。また、保健指導を定期的に行い、健康に対する理解を深め、健康的な生活習慣を身に付けさせる。	B
	③全教育活動を通じて児童の道徳性を養うとともに、いじめの撲滅のため、いじめ対策委員会を定期的開催し、未然防止と早期解決に努める。また、調布警察署や調布警察スクールサポーターと連携し情報収集を行い、問題行動の未然防止の取組を行う。	B	③東京ベーシックドリルを効果的に活用するとともに、算数科で習熟度別指導を行い、児童の実態に応じて、補充的・発展的な学習を取り入れた指導を実施する。	B	③体力テストの個人票をファイリングするとともに、結果を分析し、本校児童の体力にかかわる課題を明確にした上で、改善を図るための指導の工夫や運動に親しめるための環境を整備していく。	C
	④教員自らが児童一人一人のよさに目を向け、学級や学年、学校で共有し認め合う雰囲気醸成すると共に、道徳教育を中心に自己肯定感を高めるための日常的な取組の充実を図る。また、行事等では児童一人一人が明確に目標をもち、達成感を味わうことで自己肯定感の向上につながるよう指導を進める。	A	④全教員が学期ごとに指導案を作成配布・配布して相互授業公開をする。授業後に「授業観察シート」を活用し、1学期は基礎的な学力向上の基盤となる学級経営、2学期には新学習指導要領の視点に立った授業改善に対する指導助言を行う。3学期には全教員が1単位時間または単元の中で児童が自分の考えを表現し交流し合う場面を必ず設定した授業が行えるようにする。	C	④食に関する教育計画を基に、食育朝会や食育月間等を実施し、食に関する指導の充実を図る。また、給食配食前、配食時には毎日、管理職、学級担任、栄養士、調理師による除去食等の複数点検を行い、食物アレルギー事故ゼロを維持する。併せて喫食を伴う教育活動実施の際のチェックリストや保護者向け配布文書の形式を見直し、活用を徹底することで校内におけるアレルギー事故防止に努める。	A
	⑤異学年交流をとおして、感謝や思いやりの心、自己の役割を果たそうとする心情を育てる。また、校外学習や行事、教科・領域等と関連づけたり、地域外部人材を活用したりしてキャリア教育を推進する。	A	⑤思考場面を大切にし、自分の考えを明確に果たせて、感染防止対策を講じながらペアや小グループ及び全体での話し合い活動を段階的に取り入れ、自分の考えを分かりやすく伝えたり、友達の考えと比較したりする対話的な学習を推進する。	B	⑤児童一人一人が自己の特性を確実に理解し、発災時や日常生活場面で危険を予測し回避できるよう指導の充実を図る。	B
	(2) 成果(数値目標に対して)	評価	(2) 成果(数値目標に対して)	評価	(2) 成果(数値目標に対して)	評価
	①「豊かな心」に関わる学校評価アンケートでは、肯定的評価目標90%に対して、児童「ともだちにやさしくしている」94%、保護者「お子さんは、家族や友だちに思いやりをもって、やさしく接していますか」96、8%となった。また、「令和3年度オリンピック・パラリンピック教育アンケート」では、「自分にはよいところがあると思いますか。」「自分にとって大切な存在だと感じていますか。」「友だちがこまっているときは、すすんで助けることができますか。」「外国の人々の暮らしや習慣などを調べてみたいと思いますか。」の4項目において本校児童の肯定的回答が都平均値を上回った。学校経営方針の柱である「『自他尊重』の涵養につながる成果の一つととらえ、今後も継続していく。	A	①感染対策を講じながら実施形態を工夫して児童が自分の考えを表現し交流する場面を設定することができた。特に、児童用タブレット端末を効果的に活用した意見・思考の交流や共有は、教員自らが学び手となって研鑽を深め、多くの学年で取組ことができるようになった。そのことが主体的な学びや児童相互の学び合いの充実につながっている。学校評価アンケートでは「学習理解」に関する肯定的評価90%の目標に対して、児童95%・保護者94、6%となった。	A	①体育授業では感染症対策を講じながらも、運動量を十分に確保し、運動欲求の充足と体力の向上を図った。学校評価アンケートでは、体力向上に関わる肯定的評価目標80%に対して、児童82%、保護者73、3%となっている。制約の多い生活の中で児童の運動機会の確保、運動の日常化はこれまで以上に重要な課題ととらえ、体育授業の更なる充実を図るとともに地域・過程とも連携した取組を進めていきたい。	C

自己評価	②あいさつ運動は、代表委員会や地域・PTAとも連携した活動となり、あいさつの励行につながった。評価アンケートで「挨拶の励行」や「規範意識」に関する肯定的評価90%以上の目標に対して、「挨拶の励行」児童85%・保護者83.9%、「規範意識」児童88%・保護者91.2%となった。既存の取組に加え、児童の主体的な挨拶の励行につながる取組や仕掛けが必要である。	C	②夏季休業延長やオンライン学習の実施、学校閉鎖や未履修内容の補充のため、十分に相互授業参観の機会が確保できなかった。学年を中心とした日常的なOJTにより、授業力向上を目指すことはできた。	C	②給食配食前、配食時には毎日、管理職、学級担任、栄養士、調理師による除去食等の複数点検を行うとともに、喫食を伴う教育活動も含め、食物アレルギー事故ゼロを維持することができた。	A
	③学校独自に作成した「学校生活アンケート」及び「いじめ対策委員会」を毎月1回実施するとともに、必要に応じて臨時に対策委員会を招集・実施し、いじめの未然防止・早期発見・早期解決に努めることができた。「学校生活」「いじめ防止」に関わる学校評価アンケートでは、肯定的評価は児童・保護者ともに90%を上回った。しかしながら否定的回答があることから今後も常に危機意識を高め、未然防止・早期発見・解決に努めていく。	B	③校内研究では「すすんで関わり合い、学び合う子～一人一台タブレット端末の活用を通して～」を研究主題に据え、指導力の向上を図るために、授業による検証や講師招聘による指導の機会を設定することができ、教職員自らの主体的な学びにつながった。	A	③実施方法を工夫し、養護教諭による保健指導（手洗い指導）や食育朝会を実施することで、健康に対する意識向上につながることができ、感染拡大防止につながった。給食の配膳方法や清掃活動についても感染状況に応じて臨機応変に対応し、学校生活における感染拡大の防止に努めることができた。	B
	④キャリアパスポートを活用し、学期や行事毎に児童一人一人が目標を明確に設定したり、自己を振り返ったりすることとおして、自己実現、自己肯定感の向上を目指すことにつながった。家庭と連携したキャリア教育にかかわる取組の一つとして今後も継続していく。異学年交流活動は豊かな心情を育てるための本校の特色ある取組として今後も継続していく。	B	④児童が主体となる、児童の主体的な学びの実現に向けた授業改善を目指して教員は試行錯誤しながら努力を続けているが、まだまだ十分とはいえない。今後も行内研究やOJT等をはじめ常に学び続ける意識と意欲をもって教員自らが学び手となり、研鑽を積んでいく必要がある。	B	④感染症対策を講じながら、避難訓練を実施し、児童の危険回避能力の向上を図った。地域性を考慮した水害を想定した垂直避難訓練を実施することができた。より実践的な避難訓練の実施方法や第2次避難場所への職員による実地訓練や図上訓練の実施について、今後検討していく。	B
学校関係者評価	○自他を大切にすることを大切に育むことについて、「令和3年度オリンピック・パラリンピック教育アンケート（東京都教育委員会抽出校）の結果から、都の平均値を上回っており、成果を上げていることがわかる。令和2年度に続き、自他を大切にすることを育てていることが見られる。学校生活アンケートにおいて、児童の「ともだちにやさしくしている」で肯定的評価が94%、保護者の「思いやりやさしさ」で97%から「自他尊重の精神の涵養」も高評価である。 ○学校生活アンケートにおいて、児童の「時間を守っている」で肯定的評価が89%、保護者の「きまりを守っている」で91%から規範意識の醸成は図れている。「挨拶の励行」についても、児童85%、保護者84%から意識の向上がみられる。昨年度同様「とてもそう思う」が多く、学校や児童の主体的な取り組みの成果が現れている。 ○学校だより（児童のコメント）やHPの様子やアンケートの「学校は楽しい」94%、「当番活動・係活動の充実」91%から児童の達成感や自己肯定感の向上は見られる。		○学校だより（児童のコメント）やHPの様子やアンケートの「授業はわかる」児童96%（昨年度比3%アップ）・保護者95%の高い数値から、学習ツールの周知、コロナ禍においても授業形態の工夫が行われ、児童へ成果が出ている。 ○特に児童用タブレットを積極的に活用し、オンラインのツールを活用した学習の広さと、導入に携わる教職員の積極性がわかり、学習方法が定着している様子が推測される。		○学校だよりやHPの様子、アンケートの児童「進んで運動している」82%（昨年度比3Pダウン）から取り組みの工夫は伝わる。保護者のアンケート「進んで運動している」73%（昨年度と同様）から、さらなる日常化の工夫の必要性が考えられる。 ○アレルギー対応として、コロナ禍において簡易給食、弁当給食、普通給食等、対応変化が著しい中、職員全員で食物アレルギー緊急対応シミュレーション研修を受講したり、喫食を伴う教育活動を含め事故防止に意識高く取り組んだりした。 ○コロナ禍における運動に関する二極化がさらに進み、運動しない児童の増加と思われる状況が気になる。ケガも増加し、どのように体力を付けていくかが課題と考えられる。	

学校の特色を生かした領域 <短期的な経営目標>

4 特別支援教育の推進		5 地域連携の推進		6 オリンピック・パラリンピック教育の推進	
(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価
①個別指導計画、個別支援計画の形式を改善し効果的活用を図り、毎月1回実施する校内委員会を基軸として校内巡回指導教室、都・市SC、保護者、外部機関と連携を深め、一人ひとりのニーズに応じた支援を行う。また、校内委員会に向けた体制を再構築し、全教職員が情報共有をし、特別に支援が必要な児童に対する理解を深めるとともに、よりよい支援の在り方について考える機会とする。	A	①多摩川をはじめとした地域の教育材を活用した学習を教科横断的に取り入れる。自然観察等の体験学習や多摩川河川敷での異学年交流、行事等を通して、地域に流れる多摩川を大切に、環境を保全しようとする心情を育む。校内ピオトープの活用やJAの協力による稲作や農作物づくり、校内の農園の農作業を通して自然に親しませる。	B	①オリンピック・パラリンピック教育アワード校として2年間取り組んできた「日本人としての自覚と誇り」「スポーツ志向」の醸成を目指した取組を継続して実施、発信していく。オリンピック・パラリンピック教育の目標を踏まえ、関連資料や外部人材を効果的に活用しながら、年間計画をもとに各教科と関連づけ確実に推進する。	B
②特別支援学級では、少人数の良さを生かして児童一人一人の特性や実態に応じて効果的な指導の在り方を検討・実践するとともに、児童や保護者に受容・共感的な姿勢で指導・支援にあたり、信頼関係を一層深める。	A	②学校評議員、学校関係者評価委員による意見や評価を積極的に取り入れ、学校運営の改善を図る。また、地域学校協働本部が中心となり、既存の取組を大切にしながら、地域住民、保護者の協力体制再整備、地域防災力向上を図る。	B	②教科・領域における学習内容と関連付けながら、ホストシティに居住していることに喜びと誇りが感じられるようにする機会を増やし、今年度開催予定のオリンピック・パラリンピックに対する機運を高める。	C
③特別支援学級設置校としてのよさを生かし、学校行事や児童会活動、交流給食等、通常の学級と特別支援学級との交流活動や共同学習の充実を図り、互いに認め合い学び合う心情を培う。	B	③地域関連行事については、新型コロナウイルス感染拡大状況に応じて内容を検討しつつ、これまで同様、地域関係者の協力を得ながら、地域・保護者、そして子どもたちにとって思い出深い取組となるよう、準備・実施を進めていく。	B		
(2) 成果（数値目標に対して）	評価	(2) 成果（数値目標に対して）	評価	(2) 成果（数値目標に対して）	評価
①校内委員会を月1回開催し、特別支援教育コーディネーターが中心となって外部機関と連携した支援の在り方について検討し、校内支援体制整備や個別指導・支援計画作成について円滑に進めることができた。また、コーディネーター部会も随時開催し、情報共有や支援の在り方について意見交換を行うことで、よりよい支援につなげることができた。巡回心理士、スクールカウンセラーとは巡回及び勤務日毎に指導や支援のために有用となるフィードバックを受け、指導・支援に	A	①感染防止対策を講じながら、対面による学校評議員会・学校関係者評価委員会を開催することができ、貴重なご意見をいただく機会となった。学校関係者評価に関連したアンケートについては、初めてGoogleformを活用して実施したが、回収率（保護者）が大きく下回ることとなった。地域関係者へのアンケート実施も含め、実施方法や事前周知の仕方については次年度の課題とする。多摩川地区協議会をはじめとする地域関係者委員会では、感染防止対策及び施	B	①感染症状況を踏まえ、予定していた学校連携観戦やオリンピック・パラリンピアン等のトップアスリートや外部人材を招き、児童との交流活動や講演会を行うことができなかったものもあった。その中で、年間指導計画に沿った学年ごとの取組やポッチャ体験学習、ブラインドサッカー交流学習、ICT機器を活用した取組などを通して、育成すべき5つの資質の育成を図	C

	生かすことで、よりきめ細やかな児童や保護者への支援ができた。		設使用制限により、体験的な活動を実施することができなかった。その中で、より実践的な避難所開設訓練が行えたことは、大変有意義であった。		るよう努めた。
	②感染防止の観点からたまがわ若木学級と通常学級との交流給食や6年生による調布特別支援学校との相互訪問は中止となった。学校行事を中心とした、たまがわ若木学級児童と通常の学級と交流機会は、特に学習活動等でこれまでより多く設定することができた。今後も特別支援学級設置校のよさを生かし、互いに認め合い学び合う心情の育成を図っていく。	B	②学校ホームページを活用して様々な情報を掲載したり、教育活動の様子を随時更新・掲載したりすることで、リアルタイムに教育活動の様子を伝えていくことができた。今後も、地域・保護者には学校ホームページの閲覧について機会を捉えて呼びかけていくとともに、必要な情報等についての意見交換をしながら内容の更なる充実を図る。	B	②教科・領域における学習内容と関連付けながら、ホストシティに居住していることに喜びと誇りが感じられるように努めた。残念ながらオリンピック・パラリンピック観戦については中止となったので、大会実施の前後に各学年が興味関心や機運を高められるような取組を行った。
学校関係者評価	○特別支援学級（たまがわ若木学級）においては、校長が丁寧に個別指導をしているなど、個に応じた指導を徹底している。 ○全体的に、先生方が一人一人をよくみとり、丁寧に指導している。また、他機関にも必要に応じて情報提供することで、円滑な引継ぎや個別指導の充実が図られている。		○学校行事や学校公開ができない中、様々な工夫で保護者の期待や不安解消に込めている。学校関係者へも取組が伝わるように、献身的な情報発信が継続して行われたことに敬意と感謝しかない。		○オリンピック・パラリンピック教育では、学校連携観戦はできなかったものの、1年生のボッチャ体験や3年生のオリンピックとの交流を通して、障害者理解やスポーツ志向の醸成を目指した取組が見られた。

人材育成・組織運営					
自己評価	<p>○「チーム多摩川」～one for all, all for one～ オンライン学習実施、長期休業期間延長、ハイブリッド形式による学びの保証、学校・学年・学級閉鎖への対応、継続的な感染対策の徹底、そして多くの制約の中で、教職員が一丸となりベクトルを合わせ、子どもたちの成長を願いながら、子どもたちのために今できることは何かを考え、組織的に対応するよう努めた。 ○主幹教諭・主任教諭を中心に日常的・意図的なOJTをそれぞれ推進しながら、職員相互に研鑽を図った。主任教諭は学校運営にかかわる明確な役割を一つ以上務め、責任感をもってその役割を果たすことができていた。 ○若手教員に教育実習担当や新規採用教員への指導・助言の機会を設定することで、人材育成に対する意欲や意識の向上へとつながった。 ○新規採用教員や経験の浅い教員に対する組織的かつ計画的な指導・育成については、引き続きの課題ととらえている。</p>				
学校関係者評価	<p>○人材育成・組織運営に関して、資料や情報では評価することは難しいと考える。 児童の「学びの保障」が実現できるために、先生方の研修の充実や児童と向き合う時間的ゆとりを生む、働き方改革を推進されることを願う。</p>				

中期的な経営目標の達成状況					
<p>1：規範意識を高めるとともに、子どもたちが自分の「よさ」に気づき、自己肯定感を高めるとともに、他者を尊重しながら未来を拓く「生きる力」を育成する。 ⇒「自他尊重」の精神の涵養については一定の成果が見られることを前向きに捉えながら、学校経営の柱として今後も継続して取り組む。児童の規範意識の向上に向けては、学校生活と日常生活を結び付けて自己の行動を振り返り、よりよくしている力をさらに高めていく必要がある。</p> <p>2：「調布市立多摩川小学校 授業改善推進プラン」に基づいた、基礎・基本の定着及び主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善の推進。 ⇒ICT機器を活用した意見交流や言語活動の充実に向けて努力を続けているが、今後も重点的に充実を図ることで、児童が主役となる授業づくりへの転換を図る。児童用タブレットの活用はさらに推進できたが、より効果的な活用法を今後も模索し、積極的・効果的に活用していく。</p> <p>3：すすんで体力の向上を図る児童を育成すると共に、災害・コロナ禍において自らの安全は自ら守るという自助意識を育てる安全・健康教育の推進。 ⇒感染症対策をはじめとする健康教育、体力の向上を目指した体育の授業改善・運動の日常化に向けた取組は今後も継続する。特に、制約の多い中で生活する子供たちの体力向上や運動機会の確保については大きな課題として捉え、課題解決に努める。</p> <p>4：特別支援教育を推進し、児童一人一人に応じたよりよい指導・支援の充実を図る。 ⇒校内委員会を中心とした特別支援教育の充実、特別支援学級設置校のよさを生かした豊かな心情の育成、個別の課題に応じた組織的支援体制の一層の整備については継続の課題とする。</p> <p>5：地域の教育材を生かした教育活動を充実させると共に、地域の教育力を生かした教育活動を展開し、地域の自然や文化に親しみ、郷土を愛する児童を育成する。 ⇒多摩川に隣接しているよさを生かした特色ある教育活動の推進を図るとともに、感染症対策等によりこれまで見合わせた地域教育材・人材の活用については、次年度以降の感染状況を見極めながら、地域学校協働本部を中心に効果的な活用に向け、できることから始めていく。</p> <p>6 過去2年間にわたるオリンピック・パラリンピック教育アワード校としての取組を生かした、オリンピック・パラリンピック教育の推進。 ⇒オリンピック・パラリンピック教育の「学校2020レガシー」の構築に向けて、地域学校協働本部を中心に外部講師を招聘し、体験活動や講演会を実施する。一人一台タブレット端末や都教委から配布されている教材・資料等を活用し、ボランティアマインド・障がい者理解・豊かな国際感覚の3つを重視し教育活動を展開していく。</p>					
次年度の重点課題					
<p>○全教育活動を通じた「自他尊重」の精神の一層の涵養を図る。</p> <p>○あいさつの励行に向け、既存の取組に加え、児童の主体的な挨拶の励行につながる取組の推進を図る。</p> <p>○子どもが主体となる授業づくり、各教科等における見方・考え方を働かせながら知識を相互に関連付けて理解を深めたり、問題解決をしたりする過程を重視した学習の実現に向けた、授業改善の一層の推進を図る。</p> <p>○体育授業の充実や運動の日常化を推進するとともに、家庭や地域とも連携し、すすんで体力の向上を図る児童の育成を図る。また、災害・コロナ禍において自らの安全は自ら守るという自助意識を育てる安全・健康教育を推進する。</p> <p>○児童1人1台タブレット端末をはじめとするICT機器等をさらに効果的に活用し、個に応じた主体的な学習の推進のための指導及び教育環境の充実を図る。</p> <p>○個別指導計画及び個別の教育支援計画及び入学児童には就学支援シートの活用や外部関係機関との連携による、校内委員会を中心とした組織的で適切な支援・対応のための特別支援教育の推進を図る。</p>					